

令和2年度第3学期終業式式辞（放送）

おはようございます。第3学期の終業式、令和2年度の最終日を迎えました。今年度はコロナの影響で、大教室で皆さんの顔を見ながら話す機会を持つことができませんでした。大変残念です。それでも式典を含め、**With** コロナ時代のニューノーマルを、皆さんとともに創り上げてきた1年だったとも思えます。今日も放送で少しだけ、令和2年度、皆さんがそれぞれの学年を終了するに際してのメッセージを、終業式の式辞として申し上げたいと思います。

まずは3年生の皆さん、穎明館中学校の卒業おめでとうでございます。4月から高校生。高校でも目標を高くもって努力を続けることを期待しています。中学校卒業証書は、後ほど学年集会にてお渡しします。

さて、穎明館生の皆さん、今年度はコロナによって特別な1年になりました。皆さんに伝え続けた「学びを止めない、感染しない、させない。誰かの、何かのせいにしない」。日々変化する社会状況、全てが初めての経験の中で、先生方も模索しながら知恵を出し合って、その時々以最善の選択、判断をしてきました。皆さんもよく協力してくれました。どうもありがとう。まだまだ不安定な日常は続きます。引き続きよろしく申し上げます。

また、波乱の1年間、私は式辞や挨拶文を通じて、様々なメッセージを皆さんに贈ってきました。少し挙げてみます。「夢から志の1年にしよう」、「非常時、緊急時こそ誠実さが問われる」、「想像力を働かせよう」、「今一度、危機と不安の時代を考えてみよう」、「希望をもって学校生活を送ろう」、「1秒を生かす」、「心は形を求め、形は心を進める」、「基礎学力、コミュニケーション能力、**GRIT**、将来に向けての力を身につけていくことを意識しよう」……覚えているメッセージはありますか。1つでも2つでも心に響いて、自分のものにしてきているのなら幸いです。先日的高校卒業式では、ラテン語の「メメント・モリ」（死を想え、生きるために死を想え）という言葉を紹介し、「他人事ではない、避けられない死から、自分ならではの生、希望ある人生を送ろう」というメッセージを第34期卒業生に贈りました。コロナ禍を意識して、生と死という重いテーマを選びましたが、そもそも人生のテーマは、生と死、そして愛だと言われます。

今日はもう一つのテーマ、愛について少しだけお話しします。

愛ということでは、ドイツ生まれのユダヤ系社会心理学者、エーリッヒ・フロムの著書、『愛すること』の改訳、新装版が昨年、刊行されました。フロムについては、『自由からの逃走』、『生きるということ』なども有名ですね。私は学生時代、悪戦苦闘しながら原文を読んだ経験もあったので、今回の新装版も興味深く拝読しました。ここではまず、フロムの巻頭の言葉を紹介します。

愛するという技術についての安易な教えを期待してこの本を読む人は、がっかりするだろう。この本は、そうした期待を裏切って、こう主張する——愛は、「その人がどれくらい成熟しているかとは無関係に、誰もが簡単に浸れる感情」ではない。

この本は読者にこう訴える——人を愛そうとしても、自分の人格全体を発達させ、それが生産的な方向に向かうように全力で努力しないかぎり、けっしてうまくいかない。特定の個人への愛から満足を得るためには、隣人を愛せなくてはならないし、真の謙虚さ、勇気、信念、規律がなくてはならない。これらの特質がほとんど見られない社会では、愛する能力を身につけることは容易ではない。実際、真に人を愛せる人を、あなたは何人知っていますか？

穎明館生の皆さん、刺激的な導入だと思いませんか。著者フロムのいう社会とは 1950 年代のアメリカ社会のようですが、それから 70 年たった日本社会においても、私にはフロムの主張がますます鋭く感じられます。原題は『The Art of Loving』（愛の技術）ですが、本文には愛する能力を獲得する具体的な方法は書かれていません。その前提となる心構えが書かれています。私の読書ノートに書き留められている、心を揺さぶるようなフロムの言葉をいくつか紹介します。

- ・愛は何よりも与えることであり、もらうことではない。
- ・ひとりの人をほんとうに愛するとは、すべての人を愛することであり、世界を愛し、生命を愛することである。

- ・愛するという技術に熟達したいと思ったら、生活のあらゆる場面において、規律、集中、忍耐の習練を積みなければならない。
- ・人を愛するという事は、なんの保証もないのに行動を起こすことであり、こちらが愛せばきっと相手の心にも愛が生まれるだろうという希望に全身を委ねることである。
- ・愛こそが、いかに生きるべきかという問いにたいする唯一の健全で満足のいく答えである。

穎明館生の皆さん、皆さんはどうか。例えば友愛、皆さんは身近な友達に進んで愛をもって接することができていますか。友情を大事にしていますか。

思えばこの1年のコロナ禍においては、人々の分断、同調圧力、責任転嫁、さまざまな差別なども、メディアを通じて数多く報道されてきました。それらの背景には、愛の欠如があるように思われてなりません。

フロムは言います。「愛されるには、そして愛するには勇気が必要だ」と。

『愛ということ』、穎明館生の皆さん、ぜひ手に取って読んでみませんか。そして愛について考えを深め、人生におけるあなた自身のテーマの一つに加えていってほしいと思います。

結びになりますが、今年の卒業生、穎明館34期生も、過去の先輩方と同じように、大学進学面でとても頑張りました。高校棟教員室や昇降口の合格速報で、慕っていた先輩の名前を見つけた人も多いかと思います。34期生は、大学入試改革の元年、そして受験期はコロナの影響もあり、例年以上に大変な思いをしてきました。私は苦難を乗り越えた34期生に敬意を表したい。そして頑張って成果を残した先輩方の後に、後輩の皆さんもしっかりと続いてほしいと思います。それが今後の皆さん自身の人生の充実、そして進学校穎明館の今後の発展、伝統の継承にもつながります。式終了後、学年最後のHRでの先生方からの言葉にきちんと耳を傾け、謙虚に受けとめてください。そして、4月からの新学年のスタートをしっかりと切れるように準備をしていきましょう。

穎明館生皆の大いなる成長を心より期待しています。

以上、令和2年度穎明館中学高等学校第3学期終業式式辞といたします。